〈内地留学研修報告〉

研修テーマ「地域素材を生かした生活科の授業づくり」

Ⅰ　研修の内容

今，子供たちを取り巻く社会の現状を見ると，社会全体や家庭，地域の在り様も変化し，地域の大人や異年齢の子供たちとの交流の場や自然体験の減少が生じ，子供たちの生活から学ぶべき場や機会が奪われてしまっている。だからこそ，生活科の特質を生かし，子どもたちが活動や体験を通して自分自身とのかかわりで学んでいく一番身近な場所として，「地域」のもつ重要性は大きいと考える。そこで，生活科ではどのように地域とかかわりながら学んでいくことができるのか，「何を」を「どのように」学んでいくのかということに視点を当てて研究を行った。

Ⅱ　研修の成果

１．生活科の誕生と展開

生活科は，社会科・理科の合科としてではなく，低学年児童の発達特性や実態への対応を意図して新設された新しい教科である。生活科は２１世紀の教育に様々な問題提起をしており，それは子供たちの抱える課題に対する提案であり，学びの在り方の見直しであった。体験を重視する，個性を生かす，家庭や地域とのかかわりを見直す，授業を変えるといった生活科が問題提起した４つの視点は現代においても重視される教育の課題なのである。

２．地域での学び

具体的な活動や体験の場所である地域は重要な学びの場である。子供たちの思いや願いを大切にしながら，繰り返し対象と関わり，その思いを交流し人と共有しながら学習していくことで子供たちの学びは深まり，「地域への愛着」を育てることができるのではないかと考えた。

在籍校の第２学年の児童と地域の探検や活動をともにした実践研究を行い，子供たちの思いを検証した。地域の探検で様々な出会いをし，自分の思いをもって追及し，それを交流することで地域のよさを再発見することができ，地域への愛着がつくられていく。しかしその思いがそこで終わるものではなく，高学年での学びや，自分の生活と繋がっていくことが大切である。

また，地域での学びでは，様々な地域素材である「ひと・もの・こと」を授業の中に生かしていくことが大切である。そのためには教師自身が地域に学び，地域に愛着をもち，その素材を生かす工夫をしていくことが求められるのである。

Ⅲ　研修の課題

具体的な活動や体験を通して自分との関わりにおいて学ぶ生活科は，低学年の学びの中核を為すものとしてますますその存在意味は大きくなっていると思われる。しかし子供たちを取り巻く社会の情勢は目まぐるしく変化し，子供たちの地域とのかかわりはますます希薄になっていくことが懸念される。家庭や地域と学校との連携を図りながら，子供たちの学びを支えていけるよう地域とかかわりながら教師自身も学んでいかなくてはならない。

（玉宮小学校　田邉珠紀）

内地留学研究報告

Ⅰ　研究テーマ　「算数科における問題解決学習の実践に関する考察」

Ⅱ　研究内容

本研究は，算数科と真の意味での問題解決学習とを融合させていく道筋を明らかにすることを目的として行った。そのために，まず，算数科における問題解決学習の一般的な現状や自らの実践における問題点を挙げた。そして，算数科の教科としての目標と問題解決学習がめざすものを両立させていく上での問題点について考察した。次に，明らかになった問題点を克服していく道筋を探った。最後に，子どもたちの「主体的」な学びを引き出す具体例について，自分なりに考えた単元の例，参観させていただいた授業について考察したもの，講義で学んだ内容，研究先進校の校内研究の取り組みについてまとめた。

Ⅲ　成果と課題

子どもたちの主体的な学びについて，活路を開いてくれたのは早稲田大学小林宏己先生の「典型教材から構築教材へ」[i]という考え方である。初めは，教師が提示した教材（学習課題）であっても，それを追究していく過程で子どもたちにとって本当に追究したいこと（学習問題）が成立し，子どもたちは「主体的」に学んでいくことができるということである。単元構想については，具体的な子どもたちの顔を思い浮かべることで，教師の都合優先の授業を子どもたちのための授業に近づけることができたのではないかと思う。また，「おいしい教材は，まず教師が味わう」[ii]という言葉が表すとおり，教師がその面白さを十分に味わっている教材には，子どもたちを主体的にさせる力があるということを学んだ。公開研究会等で，たくさんの授業を観させていただく中で学んだこととしては，子どもたちの主体的な学びを創造するためには，子ども同士，子どもと教師の間にお互いを受容し合い尊重し合う温かい関係があること，子どもたちの興味関心に沿った教材が設定されていること，子どもたちの多様な考え方が出てくるような課題が提示されていること，子どもたちの多様な考えに応じた指導や支援を考え単元構想すること，子どもの予想外の反応に対して柔軟に指導支援を修正していくことなどである。まとめると，「子ども理解に努め，環境を整え，子どもたちと共に教師も学ぶ」ということになると思う。

課題の１つ目は「自然な流れの中で子どもたちの意見を編んでいく力」のことである。これは，刻々進んでいく授業の中で臨機応変に対応していく力なので，実践していく中で身に付けていくものなのだろうが，まずは学習課題に対する子どもたちの反応を予測し複線を考えることをやりたいと思う。教師の予測を超えた考え方や誤答に対しては，じっと耳を傾け，その子やその考えを生かせるように考え考え進んでいきたいと思う。もう１つの課題は，問題解決過程の評価のことである。各々の子どもの問題解決過程は様々で見えにくいことが多い。過程が重視される問題解決学習がこれからますます学習の中心になっていくことを考えれば，子どもの学びの過程を見取り評価に生かしていくあり方を学校や教科の特性に応じて考えておくことが必要である。　（勝沼小　原藤生府）

---

[i] 小林宏己『授業研究２７の原理・原則』2013年学事出版

[ii] 早稲田大学の講義「国語科教育法」で茅野先生の言葉